

2012年2月～

人間歯科学研究会報

人間歯科学研究会

〒567-0883 茨木市大手町 7-26

FAX 072-626-6519

E-mail yoshihara@gold.ocn.ne.jp

インフルエンザ A 香港型猛威をふるう

昨年暮れから、年明けにはインフルエンザと肺炎球菌マイクロプラズマが大流行とのことでワクチンを打つように訴えてきたが、すでに流行の波に乗ってしまった。

最早学級閉鎖も起こり急激な流行である。日本人は何でもかんでも経験してからでないと実際に動かない。何人かは犠牲になるが、確かなことは罹患率が高いということか。

5年前と1昨年の大流行でその恐ろしさは十分知っているはずであるが、喉もと過ぎればなんとやらで、すっかり忘れていた。事前に忠告を受けたことなど何のこともやらといった雰囲気である。

とはいえ、当たり前なことだが湿度は40%～60%に保ち、うがいを励行し、歯ブラシを10分間と手指の消毒を忘れないことは流行性感冒の予防の基本であることには間違いない。

水を考える

インフルエンザには水が大事だという。乾燥が良くないということである。冬季脱水が一番の原因になるということなので水をいつも飲んでいる者にはあまり関係が無い。

「月のしずく」はCaとMgの比率がよく、PHもやや酸性で生理食塩水や大塚製薬の経口補水液「OS-1」に良く似ていて、ときには羊水に似たまったりした感じがするという。じつはこのまったり間が温泉水の特徴であるが、次亜塩素酸のたっぷり入った上水道に慣れている方には口に合わないかもしれない。

水については面白い報告がある。口の中のバクテリアにも善玉菌と悪玉菌がいる。善玉菌は食物を噛んで唾液がたくさんでたところに混ざって消化しやすい状態にする。特に大切なことは白血球の中のリンパ球を増やすという役割を果たすことです。

外から入ってくる悪玉菌を白血球とともにやっつけて、体質を安定させる見張り番役を果たすのが水であるといえる。従って歯ブラシを励行するということは、門番として最役であるといえる。

悪玉菌は外部から入ってくる感染菌などとともに、虫歯菌のはたらきを助長したり歯周病になったり、口内炎を発症したりする。多くなると胃腸を悪くし、口から離れた

肘関節にまで進行して炎症を起こす。最近では肺、心臓そして大脳にまで影響すると
いわれている。質の良い水を欠かさないようにしなければならない。

“CamCam”の奇跡

水の働きが人間の体にとって非常に良い影響を果たす物であるということはい
ろいろな報告にある。しかしあまりよくない物から、ものによっては長期間飲用する
と低濃度障害によってかえって害になる物のあるという。

そこで唾液について注目した。いまは、唾液の成分よりもいかに多くの唾液を
出すかに注目されている。“CamCam”はただ噛むだけで大量の唾液を出し
インフルエンザの予防にも役立つという。

“CamCam”の働きには、時が経つほどに多くの利点が発表されている。その一つ
に「生涯咬む必要がある」というものだ。その理由は青年以降の前歯叢生にある
という。確かにあのカーター元米大統領も突然に叢生化している。

前歯叢生は仕方の無いことであろうか。単に高齢化や老齢化で切り捨てられる物
であろうか。美の追求は年齢によるものではないはずである。

学習が少なかったと思われる例

小児期の咀嚼学習は乳歯期におこる前歯の咬み合わせから始まる。3歳までに
学習は終わり、3歳以降は臼歯のすりこぎの学習が始まる。この期間は長く
5歳から6歳頃まで続く。とくに6歳臼歯の咬合位が決定するまで続くといつてよい。

最近の子どもたちは6歳臼歯よりも前歯のほうが先に出ることが多くなってきてい
るので、臼歯の学習が十分に取れていない。中には上顎の中側切歯が永久歯に
変わっているのにまだ6歳臼歯が生えていないという例が多くなった。これらは
人類学的な問題ではなく食文化の変化による物だと考えてよい。

例えば1980年代までの子どもの第一大臼歯を見ると約95%以上が遠心に歯肉を
かぶっていない。しかも口腔低の深さは十分にある。

“CamCam”をしっかりと噛んでいる子どもたちは、歯列咬合がはっきり形成されて
いる。

最近の報告では認知症の予防や脳梗塞、心筋梗塞への予防効果がはっきりと確認
されているという。また歯の周りの組織や歯の内部の歯髄までが咀嚼運動によって
活発化され、脳への伝達経路の役割をはたしているという報告もある。

齶頬移行部への刺激が、美容と健康に大いに役立つという報告にはごもっとも……
一歳の子どもが“CamCam”を楽しげに咬んでいる！